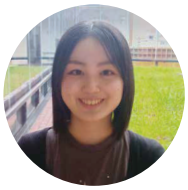
FACULTY OF LETTERS

文学部生のリアルな！学生生活 Vol.66

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、
文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。

「好き」を原動力に、限られた大学生活を全力で！



文学部人文社会学科中国言語文化専攻4年
私立十文字高等学校（東京都）出身
長田（おさだ） はるな

私は高校時代に中国出身の友人に出会ったことがきっかけで、中国語や中国文化に興味を持ち、中国言語文化専攻に入りました。1年次は毎日中国語の授業があり、ようやくずっとやってみたかった中国語を学べる時がきたと楽しみにしていました。

しかし、大学入学後に中国語学習を始めた私は、発音に苦戦する日々でした。当初は〝你好〟や自分の名前すら正しく発音することができず焦りを感じていたので、授業後にネイティブの講師に指導してもらっていました。すると次第に上達していくことが楽しくなり、もっと中国語力を身につけたいと思うようになりました。経済的な面から留学は難しい状況ですが、日本にいながらも上達するための方法を日々考えています。

趣味と中国語で広がる世界

いきなりですが、私の趣味は大相撲観戦です。「大相撲」と聞くと、皆さんはどのようなイメージを持ちますか。おそらく、若者ではなく年配の方が観戦しているという印象を持つ人が多いのではないでしょうか。しかし最近ではファンの年齢層は幅広くなっており、海外からの観戦者が激増しています。まさに大相撲という文化を発信するチャンスであると感じています。

中央大学で毎年7月に上海理工大学交流会が開催されており、私は2度参加して中国語でプレゼンテーションをしました。もちろん内容は大相撲関連。大相撲の魅力を発信できる貴重な機会であると感じ、1年目は「大相撲の歴史と文化」、2年目は「両国駅周辺のおすすめスポット」をテーマにしました。

発表の準備をする上で特に大変だったことは、大相撲ならではの用語を中国語に翻訳する作業です。留学生に原稿の添削をしてもらいながら、わかりやすい言葉で伝えることを意識しました。さらに、両国駅の観光案内所の方に駅周辺の博物館やグルメを教えてもらい、発表内容を練り上げました。交流会当日は、大好きな趣味がテーマだったからか、あまり緊張せずプレゼンテーションを行うことができて楽しかったです。

発表後、先生方に発音がクリアで聞き取りやすかったと評価していただき達成感を味わえました。また、もう少し詳しく知りたいと大相撲に興味を持ってくれた学生がいてうれしかったです。その学生とは今でもWeChatで連絡を取りあう仲で、中国語を教えてもらっています。

さらに、学外でも中国語を通じて交流ができる場がないかと探しました。すると、中国語学習をしている人が集まる会が地元で定期的に開催されていることを知り、私はさっそく参加してみました。年配の参加者がほとんどで、参加者同士で中国語の文法や単語、歌を和気あいあいとした雰囲気で学んでいました。中国語学習歴が40年と長い方や、60代で大学に入学し学んだ方、独学で習得した方など、バックグラウンドは多様です。いくつになっても探求心が旺盛な皆さんを心から尊敬しています。その姿に触れるたびに、私ももっと頑張ろうとモチベーションが上がります。このような地域交流の場が今後も続いてほしいです。

中国近現代文学演習

私が履修している「中国近現代文学演習」では、中国、台湾、香港、マレーシア、シンガポールなどの近現代華語文学・映画に加え、北米の華人による作品まで幅広く扱い、各テーマに沿ってグループで発表を行っています。

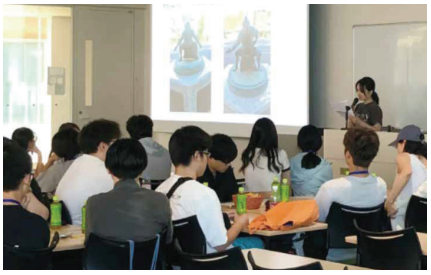
これまでに何度かグループ発表を重ねてきましたが、中でも印象深いのがシンガポール出身のアンソニー・チェン監督の映画についての発表です。作中の場面



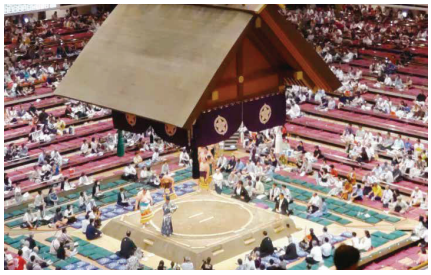
2024年上海理工大学交流会



中国言語文化研究室



2025年上海理工大学交流会



国技館で大相撲観戦

憩いの場

私は、3号館5階にある中国言語文化共同研究室をよく利用しています。共同研究室には多くの書籍やDVDがそろっているため、レポート作成などで利用するのはもちろんのこと、「交流の場」としても活用しています。先生方や室員の方、大学院生と気軽にお話しできるので、とても良い場だと感じています。悩み事やうれしかったことなど、どんなことでも聞いていただけて、心を落ち着かせることができました。また、中華圏出身の大学院生に中国語を教えてもらうこともあります。

大学だからこそ得られるこの貴重な機会を大切に、全力で取り組みたいです。

治区の映画を題材に、中国政府の同化政策による人々の感情や生活の変容を研究したいと考えています。単に中国語を学ぶだけなら語学学校でもできますが、このような「研究」は大学でしかできません。文学や映画から中国語圏の現実を知ることは、真の異文化理解や深い交流につながると考えています。

が示す意味を、アジア金融危機という歴史背景とともに論理的に考察することは難しかったですが、メンバーとの意見交換を経て自分たちなりの結論を導くことができました。映画を通して中華圏の社会の実体や国民の声を読み取ることはとても興味深いです。

今後の卒業課題研究では内モンゴル自

学生生活も残りわずかですが、研究室へ行き、さらに学びを深めていきたいと考えています。

学部だより

Bienvenue! ようこそ研究室へ!

フランス語文学文化研究室

「入学前は『文学部って将来何の役に立つのかな』と思ってましたが、いつの間にかフランスにのめりこんでいる自分がいました」。先日、研究室に来た卒業生がこんな話をしてくれました。当専攻の学生はフランスとの出会いを通じてみずからを客観視し、問いかけ、日々さまざまな形でみずからの秘めた力と可能性を試しています。

研究室には約25,000冊の蔵書があり、その約85％を洋書（主にフランス語）が占めています。電子化されていない貴重古書をはじめ、中世から現代までジャンルも多岐にわたり、まさに知識の宝庫です。最近では美術書や哲学書、フランス語に翻訳された日本文学などに対する需要も高まっています。時代別、作家別に配架されており、関連書籍の発見ができるのも研究室ならではの光景です。

フランス語文学文化専攻には、2017年度から語学文学文化コースと美術史美術館コースの2つのコースが設置されました。語学文学文化コースでは文学（小説、詩、言語、演劇など）や文化（映画、食、社会問題など）を幅広く学ぶことで固定概念を超えて視野を広げ、想像力を培うことができます。美術史美術館コースでは美術が背景となる歴史や地理を学ぶことでアートの社会的役割について考えます。さらに、美術館見学やゼミ研修旅行などを体験することで、より一層の専門性を身につけることができます。どちらのコースも座学だけでなく、プレゼンを重視する全員参加型の授業が多くあります。また、学芸員資格取得やフランス留学、インターンシップへの参加など、積極的な学びに挑戦する学生の姿も年々多く見受けられ、専攻内の活気を実感しています。

書物を用いた学問的研究だけでなく、フランスに留学し、現地の人々との交流を通じてさまざまな国の友人を作り、文化や言語、歴史について多様な知見を得ることは、タイパ・コスパ重視の必ずしも正解のない世の中で、柔軟な思考力と俯瞰する視点を身につけるための、かけがえのない経験となります。

